

読書のすゝめ

その12

H 28 5 / 30

落語はいかがが？

明日は月曜。また仕事（学校）だ。世間では「サザエさん症候群」とやらいわれる憂鬱な日曜の夕方、みなさんは日本テレビの「笑点」見えますか？歌丸さんというおじいちゃん（失礼）が司会を辞めたんだって・・・。という話は耳にしたけど、そもそも「落語」って何？「寄席」ってどこにあるの？歌舞伎や文楽よりは敷居が低そうな「伝統芸能」。大家さんにご隠居さん、八っさん熊さん若旦那の楽しいやりとりの世界を紹介します。



『赤めだか』立川談春（扶桑社文庫）

二宮和也、ビートたけし出演でテレビドラマ化されました。笑って泣いて胸に沁みる、破天荒な名エッセイ。17歳で天才落語家・立川談志入門。両親の反対により新聞配達をしながら、「上の者が白いと云えば黒いもんでも白い」世界での落語家前座修業が始まる。三日遅れの弟子は半年で廃業。なぜか築地市場で修業を命じられ、一門の新年会では兄弟子たちがトランプ博打を開帳し、談志のお供でハワイに行けばオネーサンに追いかけられる……。様々なドタバタ、試練を乗り越え、談春は仲間とともに二ツ目昇進を目指す。



『えんま寄席 江戸落語外伝』車浮代（実業之日本社）

ここは落語の世界の住人が落ちてくる地獄「えんま寄席」。閻魔を納得させれば天上界へ行くことができるが怒りを引き出せば地獄へ落ちる。最初に「えんま寄席」にあがってきたのは、人情話の代表格『芝浜』で登場したお先。けなげに夫のために生きた彼女は天上界へと思いきや……。古典落語をベースに、本当は怖い「その先の噺」を描く、異色の連作時代小説集。

『落語三昧！』柳亭市馬（竹書房）

明治期の大師匠・三遊亭圓朝翻案の怪談噺『死神』。夫婦の絆を感動的に描いた人情噺の代表作『芝浜』。現代的な工夫と爆笑が連続する『時そば』。——名作・名演がずらりと並んでいます。

【収録演目】

『阿武松』柳亭市馬／『時そば』『芝浜』瀧川鯉昇／『野ざらし』『妾馬』柳家花緑／『明烏』古今亭菊之丞／『死神』『応挙の幽霊』三遊亭兼好／『夢金』古今亭文菊

『道具屋殺人事件（神田紅梅亭寄席物帳）』愛川晶

（東京創元社）

亮子の夫は落語家・寿笑亭福の助。彼と出会うまで落語と縁のなかった亮子も、最近では噺家の女房らしくなってきた。師匠の山桜亭馬春が脳血栓で倒れてしまっただけで、以来、寿笑亭福遊に師事している福の助だが、前座の口演の最中に血染めのナイフが高座で見つかり、大騒動になったことを馬春に相談したところ……。落語を演じて謎を解く！三編収録の本格落語ミステリー集の第一弾。ストーリーに巧みに落語的要素が練り込まれ、くすぐりもよく効いている。それぞれの結末も、納得させられたり、笑わされたり、ほろりとさせられたり……。



※ 紹介の本は図書館にあります！